

『鷲林拾葉鈔』記事対照表 (二)

渡辺 麻里子

〔凡例〕

一、記事対照に使用したテキストは以下の通りである。

【鷲林拾葉鈔】 ……日光山輪王寺天海蔵写本

・参照、蓬左文庫蔵写本

・慶安三年刊、版本〔法華経鷲林拾葉鈔〕 臨川書店 一九九一年

・翻刻【増補改訂 日本大蔵経】第二四卷・二五卷、法華部章疏四・五

【一乗拾玉抄】 ……叡山文庫天海蔵写本

影印、中野真麻理【一乗拾玉抄の研究】(臨川書店 一九九八年)

翻刻、中野真麻理【叡山文庫天海蔵「一乗拾玉抄」(卷一) 翻刻】

〔国文学研究資料館紀要〕二五号 一九九九年三月

【轍塵抄】……………日光山輪王寺天海藏写本（ハ本）（永祿四年（1561）舜雄写、七冊本）

・参照、高野山図書館三宝院寄託写本、書写年次不明、延深とあり。

【法華経直談鈔】……………叡山文庫金台院藏写本（【法華経直談鈔 古写本集成】 臨川書店 一九八九年）

・参照、寛永十二年（1635）刊、版本（【法華経直談鈔】 臨川書店 一九七九年）

一、テキストの配列は上より、【鷲林拾葉鈔】、「一乗拾玉抄」、【轍塵抄】、【法華経直談鈔】である。【一乗拾玉抄】の成立は、【鷲林拾葉鈔】より先行するが、【鷲林拾葉鈔】を軸にするため、【鷲林拾葉鈔】の下端に据えている。

一、一段め、【鷲林拾葉鈔】の見出しは、日光山輪王寺天海藏写本の一つ書きの項目で、「1」「2」「3」として通し番号をつけた。また参考として、版本の見出し（巻頭）との目次による）を添えた。

一、二段め、【鷲林拾葉鈔】の記事は、見出しの一つ書きごとに、さらに記事を細目に分け、それぞれ出現順にABC……と記事を通し番号をつけ、記事の内容の大略を示した。また、第二十八番以降はアイウ……で示した。記事の内容は、逐語訳を目指した。テキスト間の比較の都合上、なるべく簡略にしないようにした。

一、本文における引用について、例えば「記三云……」の場合は、「記三に云うことには」とせずに【記三】と略している。

一、三段め【一乗拾玉抄】以下については、記事内容が【鷲林拾葉鈔】の記事に大略同じである場合は、【鷲林拾葉鈔】の記事符号ABCを以て示した。

一、記事内容が、【鷲林拾葉鈔】の記事に大略同じでありながら、内容にいくらかの差異・特徴を有するものは、【鷲林拾葉鈔】の記事のバリエーションと見なし、【鷲林拾葉鈔】の記事記号ABCに対応してA'B'C'等の記号を用

いて出現順に示し、異なる内容を簡略に示した。

一、「鷺林拾葉鈔」にない記事については、出現順に a b c の記号を付して示した。以降の段でその記事のバリエーションと見なせる記事には、前項と同様に a、b、c の記号を付した。

一、「鷺林拾葉鈔」に対応する記事が、外の一つ書きの項目の中にある場合、その旨を記し、各記事の対照は、「鷺林拾葉鈔」の該当記事に対応させて記した。

一、「一乗拾玉抄」以下の諸本については、各々一つ書きに通し番号を付し、記述の順がわかるようにした。

一、人名の表記は、通称そのままに、略称は適宜改めた。

一、書名の表記は、なるべく原文のままとし、「此経」など、文脈に照らして補う場合は「法華経」など、通用する略称を用いた。

一、和歌は、「鷺林拾葉鈔」では一首全部を掲載し、へ1へ2へ3として歌番号を付した。「一乗拾玉抄」以下は、対応する歌番号を示し、語句の異同を示した。

*この記事対照表の作成にあたり、記事対照の方法を、市古貞次編『平家物語語研究事典』（明治書院・昭和五三年）所収、「平家物語語本記事対照表」を参考にし、多くを依っている。

◆ 序品第一之一 (2)

項目		<p>(4) 付法華伝訳 不同事 二、付法華伝訳不 同事</p>
『鷲林拾葉抄』	×	<p>A 法華経に紫園・白疊とい う二本がある B 【法華伝】長安には四本が伝 わる。一は正無畏の『法華三 昧経』、二は竺法護の『正法 華経』、三は羅什の『妙法華 経』、四は闍那崛多の『添品</p>
『二乗拾玉抄』	(5) 一、儒道尺ノ三卜者 a 儒とは王法なり。尺 とは仏教なり。道とは 孔子老子なり。儒道は 事理当然と立つなり。 これは当体の沙汰な り。尺子は方便の教と 立つ。孔子の空無自然 と立つ意は、岩くづれ て魚を死る道理に任せ るなり。	<p>(6) 五度六度翻訳事 B 妙法華は羅什の訳 である a 天台は三大部の判釈 を設ける時、玄義は主 題の五字を釈し、文句 は初めから終わりまで</p>
『轍塵抄』	×	<p>(4) 翻訳不同事 B 一に、魏の高貴卿 公甘露元年、外国の沙 門支疆梨接魏を正無畏 と云う。交州に於て法 華三昧経を訳す。一部 六卷或は十巻と云々。</p>
『法華経直談抄』	×	<p>(4) 翻訳之事 v 天竺の法華経は梵本 なり。梵文は心得難き 故に震旦に於て漢字に 書替るを翻訳とは云う なり。 w 同本異訳という事</p>

法華經』である

C 三本は多羅の葉で、羅什の本は白疊である

D 文句の一処の釈には、二つは存し、二つは没したとする

E 『正法華經』と『妙法華經』は世間に流出した

F この他に『薩芸芬陀利經』を加えて五度の法華とする

G 又、六度の法華と云うことがあるか。

H 但し、『正法華經』の事。西晋上代に訳したが、時機が感応せざるか。すべて天下はこれを行わなかった。

I 今の羅什が訳した『妙法華經』は、後秦の末代に訳したが、文義に誤りがなく、時機に相順したか。漢学は悉く行用した。本朝も悉く信伏した

J 『記十』『正法華經』は西晋より唐に至るまですべて行用せず。この『妙法華經』は後秦に訳し終わり、四海に盛伝

釈した。

b 所詮三大部広しと雖も四教五時なり。

c 是を妙楽は一部縦横不出一念などと釈した

d 妙法蓮華經と一返唱えれば、三世の諸仏の名号一代の教法を誦るなり。

e 一切の有情皆法華に値せず成仏し難きなり。妙法に一度値ぬれば生死を出離するなり。出離の進退は我が心に有りと云いて十方横豎の浄土へも任せて我が心に行くべきなり

f 二に、西晋武帝泰始元年、月支国沙門曇摩羅察、晋には法護と云う。洛陽に至る。大康七年八月十日に正法華經を訳す。廿七品一部十卷。時に長安の青門に居す。人号して敦煌菩薩と云う。然に南山經の序及び内典録に西晋の惠帝、永康年中に訳すと言えは誤りなり。輔註の中に見たり。敦煌は処の名なり。

g 三に、東晋の武帝、咸康元年、支遁字は道根、方等法華經を訳す。

h 四に、後秦姚興弘始八年正月龜茲国沙門鳩摩羅什秦には童寿と云う。長安の草堂寺に於て、妙法華經を訳す。七卷廿八品或は八卷

(是は『開皇三寶録』

り。

B: 『法華伝云』

C:

I:

J:

n:

I: 羅什所訳の妙法華經は後秦の末代に訳と雖も文誤り無し。故に、天下挙げて信伏し、漢家本朝悉く信用するなり。

J:

J:

J:

J:

J:

した。

K 五度・六度の翻訳不同なれども羅什の訳の『妙法華經』は仏意に通じ、聖旨に叶う。L 感応し、節を得て流行し、世に盛んである。

M 諸訳に勝り、誤りなきことを知る。

の説に依る。

i 【南山經序】東晋の安帝隆安年中と云うは誤りなり。

j 【補註（文句）】に見えたり。

k 鳩摩羅什を童寿と云うことは、童子にして而も寿年の徳ある故なり。寿年とは耆年のことなり。

l 五に、大隋の文帝仁寿元年、北印度の沙門闍那崛多、隋には志徳と云う。南賢豆国沙門達摩笈多、隋には法密と云う。大興善寺に於て、添品法華を訳す。八卷或は七卷是又廿七品なり。

m 【私云】五度の翻訳此の如し。是又年代の異説有りと雖も之を以て正と為すべし。内外典

(6) A
(6) B
(6) C
D

の説を勘へ合するなり
n 【文句八】に両存両没
と判ずるは、両存は正
妙二本なり。両没は方
等法華と法華三昧とな
り。此外に、薩に云く、
芬陀利經一卷三紙失記
なり。宝塔提婆両品の
同本と見たり。

o 【法華三昧經】一卷
十一紙、智嚴の訳、こ
の両經は大藏目録に載
たり。

p 近代宋朝に渡せる十
卷の法華經有り。浄名
居士を以て対告宗と為
す。

q 不空三藏の訳した
『妙法蓮花威儀形色經』
有り。一軸にして小卷
なり。

r 【蓮花三昧經（無障碍
經）】在り。經の具な
る題は妙法蓮花三昧秘

(↓n、Iの前へ)

<p>三、羅什翻誤無誤</p> <p>誤事</p> <p>(5) 羅什翻誤無</p>	
<p>A</p> <p>〔法華翻經後記〕</p> <p>①弘始八年夏、鳩摩羅什(童 寿と言ふ)は、長安大寺の草 堂で、道生・僧肇・道融・僧</p>	
<p>(8) 正妙二本ノ勝劣二五 ケノ正邪ト云事有リ</p> <p>A、法華は弘始八ヶ年夏 の頃、長安城の逍遙園</p>	
<p>* 後秦の妙本誤無事。 梵本に於て白氈糸亂の 両本あり。什公は白 氈の正本に依り、法護</p>	<p>密三摩耶經と云えり。 智澄大師將來すと見た り。唐朝の經には是も 十卷と註すること有り</p> <p>s 惠心先徳は其の中の 八句の偈を引きたまえ り。</p> <p>t 上來云う所の數度の 翻譯の中に、今講ずる 所は妙法華なり。</p> <p>u この經、宿祿東北に 在り。流布一天に盛な り。四海八挺、六万九 千の金文を案じて五畿 七道、七軸八軸の妙典 を配ぶ。王臣民の帰依、 余訳に於てよりも甚だ し。自他宗の渴仰、他 經に於てよりも深し。</p>
<p>A₂</p> <p>(5) 羅什舌不燒之事</p>	

叡等、八百余人、四方の義学英秀二千余人と共に、再び『法華経』を訳した。

②衆と詳しく校究した。

③羅什は自分の手で梵文の経を執り、秦語に訳した。

④姚興は自分の手で旧経を執り、相儲けて新文を校定した。

⑤文義俱に通じ、妙理再び中る。

⑥（興と羅什の問答）

呉の興が羅什に言う、訳を見ると、廿八品の文義は美しく宗礼自顕である。羅什が云う、善いかな。明王法燈を続けて英を長し、暗夜の迷徒を開曉す。疑を發するにあらずんば誰が深旨を明らかにしようか。旧梵文を勘するにあたかも斯くのごとし。

B
① 予は昔天竺国にいた時、遍く五竺に遊び、大乘を伺つて大師須利耶蘇摩より理味を滄稟した。

草堂寺において龜氏国の羅什三藏、秦の代に八ヶ年に四人上足八万人、義学二千人の英秀を集め、

a 如来入滅して一三五三年目に訳す

b 筆者は謝靈雲、謝玄義、兄弟して書くなり

c 謝靈雲は初めより寿量品まで書くなり。この品の一塵一劫の文を書き落とすに依りて墮獄するなり。

d 寿量品以後をば謝玄義書き次ぐなり。

e 或いは謝靈雲は普門品の長行を写し、円明法師は世尊偈を書くなり。

f 一義云、弘始十年に訳すと見たり。是は弘始二年より十年までは八ヶ年なる故に、相違

は糸乱の不正に向う。
↓〔4〕A

B' 翻訳後記の中には、

① 予昔天竺国に在し時、遍く五竺に遊びて尋て大乘を對せしに大師須利耶蘇摩に侍て理味を滄稟す。

② 慇懃にして梵文を付屬して云く、仏日西に入りて遺燿將に東北に及ばんとす。茲典縁東北に在り。慎んで弘傳すべし。

③ 昔婆藪盤豆、優婆提舍を製作したその正

B₂

②師は慇懃に梵本を付嘱して言った。私は日が西に入つても遺る光が東北に及ぶだろう、曲により東北に縁がある。汝慎んで伝弘せよ。

③昔、世親が『優婆提舍』を製作した。これはその正本である。其の句偈を取ることなかれ、その真文を取捨することなかれ。

C 予は忽忽として、忝かたじけなくしくこれを滄受した。笈を負つて携えて来到する。今伝える所、良所以あり。宗旨を詮定して異途あるべからず。

D 道生・僧肇・道融・僧叡等八百余人の義学英秀二千余人が文義を撰定した。名匠碩学が同時に訳した。故に誤りはあるはずがない。

E その上、大師須利耶蘇摩三藏は梵本の付属を預け、その句偈を取捨してはいけない、その真文を取捨してはいけない

無きなり。
g 私云、義学とは学者なり。英秀とはヒデタル人なり。

(8) 正妙二本ノ勝劣二五ケノ正邪ト云事有り

h 一に、八宗の高祖たる竜樹の御自筆の梵本に依りて羅什は訳するなり。法護は竜樹の梵本には依らざるなり。

i 二に、羅什は一文一句悉く焼香散華して文殊の往来を待て此の經を訳す。法護は心の任に記る故に誤り有り。

j 三に、羅什は中天竺の人なる故に言はよし。法護は田舎の人なれば言は悪きなり。

k 四に、羅什は四人の上足、八万人の義学、二千人の英秀と共に訳

本なり。其の句偈を取捨することなかれ、其の真文を取捨することなかれ。

(5) 一、姚秦の三藏法師鳩摩羅什詔を承て訳す

q 秦に凡そ四つ有り。一に亡秦、二に前秦、三に後秦、四に西秦なり。亡秦は嬴氏、前秦は苻氏、後秦は姚氏、西秦は乞伏氏なり。

r 羅什は後秦の代に經を訳す故に、姚秦と云うなり。

s 亡秦は周の後漢の前きなり。後の三は皆、十六夷狄の中に在り。三藏と云うは、經律論の三に通達する故なり。

u 法師は、伝訳弘通の師なり。

D 一 さて筆記は謝靈運と云人なり。唐土第一の文者なり。故に誤り有るべからず。

<p>いという誠を兼り、師資稟承正翻訳である。どうして外の訳と混じるだろうか。</p>	<p>F また翻訳の砌には、文殊が常に影響した。普賢が来て句逗を授けると見えた。</p>	<p>G 又、舌根不焼の願あり。所以に、翻訳の経論、一字一句も誤り無ければ、焚身の後、舌根変わらざると云々。遺言の如く、舌根は変わらざ紅蓮華のようであった。</p>	<p>H その舌は姚興が之を崇し金で鉢を作り、草堂寺に納めた。</p>	<p>I 代々の聖王はこれを尊敬した。</p>	<p>J 師師伝来して伝教大師が我山に将来して納めた、という。</p>	<p>K 【開元釈教録】(羅什の伝記) 羅什は秦に童寿と言う。天竺の人である。母が出家修道し初果を学得した。羅什は七歳で出家、師より教を受け、日に千偈誦した。偈は三十二字</p>
<p>す。法護は一人して訳す。</p>	<p>I 五に、南岳大師、正妙の二本を一つの法蔵に籠りて靈瑞を見たまうに、妙経は余りに勝て光を放つ。正経は光無し。故に南岳大師も用いざるなり。</p>	<p>m 釈云、豈に八万の螢火を以て孤輪の月光を福せん。</p>	<p>n 妙経に靈験多き事をば、妙楽の釈云。此経流布の砌に多かるべしと云えり。</p>	<p>o 伝記云、正法華を受持すれば、普賢来て摩頂すと云へり。仍て法護をば普賢の垂迹と云うなり。</p>		
<p>v 鳩摩羅什、文には鳩摩羅耆婆と云うなり。鳩摩羅は父の名、耆婆は母の名なり。父母に従て名を立つるなり。</p>	<p>w 此には童寿と云う。童子年にして寿年の智有る故なり。</p>	<p>x 什と云うは、此の方の字の什を知る故なり</p>	<p>(羅什の伝記)</p>	<p>K (羅什の修行) 什、七歳にして出家し日々三万二千言を誦す。九歳にして母と同じ罽賓国に至る。そこに盤頭達多という者有り。三蔵九部悉く以て精明なり。羅什は師と為す。十二才にして月支国に至る。北山に</p>		
<p>F、 L、【開元録云】</p>	<p>G、</p>	<p>H、</p>	<p>I、</p>	<p>J、</p>	<p>I 終南山の道宣律師、伊吒天に値て羅什は如何なる人ぞと問いたまえば、伊吒天の云く羅什は是文殊の再誕にて過去七仏の御所にして</p>	

ある。凡そ三万三千言である。羅什は九歳で諸国に播した。

一羅漢あり。羅什を見て言く、此の沙弥、三十五才までに仏法を興せん。もし戒全からずは才明の法師ならん。羅什の母三果を証す。乃ち天竺に之く。行く日に臨みて羅什に語りて云く、大法をして方等の深教大いに真丹に蘭かん。只汝自身に利益無からん。羅什云くもし大法をして流伝せしめば燃鐵の苦と雖も何の恨みあらんと。後龜茲国に返て大乘の法要を悟り、盤頭達多返て羅什を師して時に前秦の符堅讚して開中の王と号す。

然に、建元十三年の正月に、大史奏る様は、外国の分野に奇星出現す。大徳の智人有りて

經を訳すと答たまえり。故に、羅什三蔵の翻訳したまう処の妙法蓮華經は誤り有るべからざるなり。

(羅什の伝記ナシ)

中国を輔すべき瑞相なりと言ふ。其時、符堅仰せられる様は、朕聞く西域に羅什と云う人有り。彼の人かと云て、遂に驍騎將軍呂光と云者に七万軍兵を相副て差し遣わして西方の龜茲国を伐つ。呂光羅什を得て帰る。呂光羅什の年少なるを見て乃ち龜茲国の王女を以て什に妻す。呂光已に涼州に至るに及びて符堅姚長の為に害せらる。姚長潜して又開外王と号す。姚長卒して後其の子姚興立て王と爲す。弘始三月連理樹有りて廟庭に生ず。逍遙園の蕙皆反て香草となる。其時姚興祥瑞已に現する上はとて西方の呂隆を伐て方に羅什を

L 羅什は終に臨み疾をとう。
衆僧と別れを告げて云く、法
により相遇う。殊に未だ伊心
を尽きせず。方に又二天世異
なるか。惻愴自ら闍昧を言う
べし。謬伝訳に充つ。もし伝
える所に謬無ければ、焚身の
後にも舌は焦爛しない。秦の

L₁【釈云】羅什臨終に
及て告げて云う。若し
訳す所誤り無くんば便
ち身焼けども焦げずと
云えり。弘始十五年四
月十三日に、七十にし
て逍遙園にして依て外
国の法に依て焚く。形

L₂ 羅什は卒する日に
臨んで云う。訳する伝
に謬り無くんば、焚身
の後舌根焦爛せずと云
い畢て乃ち秦の弘始十
一年八月二十四日に卒
す。火を以て焚く。唯
舌のみ焦がれず。翻訳

得て歸り、開に入る。
其の年の十二月に長安
城に至り、諸經を訳す。
姚興羅什に語りて云
く、大師聡明なり。も
し一旦に死後世の法種
嗣者無からんと。遂に
伎女を以て羅什に妻
す。羅什はより已後、
僧坊に住せず。屋舎を
立てて居す。講説する
毎に喻を立つ。臭泥に
淨蓮花生るが如し。其
の花を取って、臭泥を
取るこなかれと。

(L₁ ↓ Gの前に)

<p>弘始十年を以て、逍遙園で、外国の法によつて尸を焚した。薪減し形化すれども唯舌のみ反らず、弘法の微有ることを信ず。</p> <p>M 凡羅什は三世覺母の再誕として今の仏に限らず、七仏の滅後に出て法華を翻訳するといふ事、南山(道宣)の『律相感通伝』に見える。</p>	<p>〔6〕羅什者最略也。</p>
<p>任にして変わらず。</p> <p>P【法華伝記】法師は是文殊の化形、昔は靈山の聴衆、今日経を訳し筆を取る時は、筆より光を放つ。光の中に或は文殊現す。或は仏身を現す。四王加護す。中に於いて多門隨身す ↓〔13〕A</p>	<p>A 羅什とは、最略である。具に云う、耆婆鳩摩羅什と云うのである。</p> <p>B 母は丘茲国の大王の妹、其名は耆婆という。</p> <p>C 父は鳩摩羅涅槃と名づく。天竺人である。五明兼美の三蔵である。赤梅檀の釈迦像を荷擔じて天竺より龜茲国に渡つた。昼は三蔵が仏を負い、</p>
<p>の誤らざること分明なり。</p> <p>Y 奉詔とは、詔は上命なり。</p> <p>Z 訳は言を伝える心なり。訳は易なり。西天の音を秦の語に同くせしむ故に訳と云うなり</p> <p>A【礼記】第四卷王制篇の文に、言語不通嗜欲不同達其志とあり。</p>	<p>×</p>
<p>(A、B、C、D) ↓</p> <p>〔4〕(へ)</p>	<p>×</p>

<p>D 夜は仏が三蔵を負つて都率の内院まで登り、弥勒菩薩の説法をよく聞かせた。 仍て着婆は母より、鳩摩羅は父から、什は字である。この方には童寿と云う。</p>	<p>×</p>
<p>×</p>	<p>×</p>
<p>(6) 經を訳す事 a 經を訳すには読梵文訳語筆受は調文等の四人有り。筆受と調文は儒者なり。訳語と云うが梵漢対易する人なり b 法華の筆受とは謝靈運と云う事、未だ確かなる説を見ず、尋ぬべし。</p>	<p>(7) 法華の題号 c 法華の題号、通涉有ると雖も、大に分て正妙添の三本なり。此の三部翻訳の時代を以て次を定める時は正法華</p>
<p>×</p>	<p>×</p>

<p style="text-align: center;">×</p>	
<p>(9) 一、一切衆生の成仏は法華に限る。</p> <p>a 【妙楽大師】 仏道所生法華三昧。</p> <p>b 【山家】 法華に漏るる無機皆成仏道故。</p> <p>c 【伝教大師歌】 法華經に値ねばあはでさてはてぬ値えば即ち仏にぞ成る。</p>	
<p style="text-align: center;">×</p>	<p>を初めと爲し、妙法華を中と爲し、添品法華を後に居る。</p> <p>d (8) 品の題の妙添両本品の題の妙添の両本は替らず、提婆品の有無是其の差別なり。但し品の前後差せり。囉累を最後に在く。陀羅尼品を移して神力品の下、葉王品の上に在くなり。</p>
<p style="text-align: center;">×</p>	

d 尔前に其の得益多き故に、衆生の成仏法華に限らざると云う

e 鬼兵部の法印はそれも法華の得益なり。順海の弟子に侍従上野というが如く、法華の上の華嚴、法華の上の阿含と意を得れば、相違無し。

f 法華に体無し。尔前を以て体と為す。

g 惠表比丘武当山にして法華を講じたまう時、天人来て、花菓を以て供養申す。比丘、何なる人ぞと問いたまうに、天人多く有る中に、我等は此山の奥に五百の蝙蝠にて候が、此経を講じたまうに法華の功德に依て、天上に生ず。御札の為に来ると云なり。是もかわ

	<p>(7) 就法華三種法華云事有之。</p> <p>四、三種法華事</p>
	<p>A 法華について三種法華といふことがある。源は山家の釈より出る。</p> <p>B 【山家釈】「於一仏乘」とは根本法華の教えである。「分別説三」とは隱密法華の教えである。「唯一乘」とは顯說法華の教えである。妙法の外に更に一句余経もない。</p> <p>C 是は最澄が異朝より相承したもので、智威大師の御釈より始まる。</p> <p>D 根本法華は仏意内証の法体、未だ説法されない如来内証の法華である。この内証を隠して未熟の機性のために三教四味の方便を設けた。これ</p>
<p>ふりの当体では法華とも妙法とも知らざれども、妙法不思議の功德に依て、一に人天果報を成じ、二に仏道果報を成ずるなり。</p>	<p>×</p>
	<p>×</p>
<p>(10) 三種法華之事</p>	<p>A₁ B₁ D₁</p>

が隱密法華である。根機純熟の時節を待ち、今が正にその時、決定して大乘を説こうと云い、靈鷲山で八年間本迹二種の法華を説いたのを、顕説と云う。そのため釈迦の一代はさながら三種の法華である

E 華嚴は内証の思惟で未だ口輪の説法に及ばないので、根本である。中間の三昧は隱密である。第五時は顕説である。このように、意を得れば、さながら法華の外に他の經はないのである。

F また別に、巻軸を相伝する時、「般若心經」は、得道の夜の般若である。

故に「經」三世諸仏は般若波羅蜜多の故に阿耨菩提を得る。これを本として五時八教の説教は起こったのである。故に根本法華である。「阿弥陀經」は隱密法華である。妙法の名字を隠して西方十万億

F₁

土の外に阿弥陀如来が出世し。極悪不善の衆生を引接しなざると説く故に隱密法華である。八軸の妙経は、顯說法華である。

G この他、一代の説教さながら根本隱密等の義、有るべきである。

H 所以は、仏意の方には、一代悉根本法華、機情の昇進は當機益物の教化にして、仏意の内証を知らない人には、隱密法華である。純熟の機縁に對して円融一円の法を説き、三觀一心の得益を成すは、顯說である。これは即一法の三名である。

I【先哲口伝】根本法華を隱密、隱密法華を顯說と云う。

J【釈籤】法は既に本妙、庵は物情による。故に知る、但だその情を開けば、理は自ら本に覆する、と云う。この釈を思ふべきである。

H、

a 我等が朝朝暮暮起るの念念も隨緣真如緣起常住功德なれば、法華の体なり。迷て覺えぬ程は隱密法華なり。只今も我等が色心は妙法の功德なりと悟れば即ち顯說法華なり。

K 又、第五時法華について、一部の始終並びに三種法華ということがある。その義は上になぞらえるべきである。

L 当流の往古の相伝には、序品を以て根本法華と習う。如来の内証のままにして未だ説法をしていないからである。

M 御廟大師は、三種の他に内証不可説の法華を加え、四種の法華をたてた。この仏の意志を根本法華という。一仏として現前しない内証の法体、元意の重位を内証不可説の法華と称するのである。その体を尋ねれば、根本法華の外にない。故に三種を以て正意と習うのである。

M 又、伝教大師が東坂本正源寺において誕生の時、宿生の御持経と御持尊を左右の御手に握って誕生した。御持尊は金銅の薬師如来像の左の御手に之を持つ。右の御手には、

	<p>〔8〕調卷不同事</p> <p>五、調卷不同事</p>
<p>N 金銅の薬師は根本中堂の本尊で、一刀三札の薬師、自ら作りなされた時、覆身なされた。</p> <p>さい。</p>	<p>A 多くは、和本は八巻、唐本は七軸である。</p> <p>B 伝教大師が和泉国真木尾で「法華経」を講じたとき、明神が「願わくは、この經典を八巻に調卷して法華八講を修し法樂して欲しい」と託宣した。この神勅に従って八巻となった。これが本朝における法華八講の始めである。但しこれは異説である。</p> <p>C 九州の宇佐八幡宮で「法華経」を修した時、表白を読ん</p>
<p>×</p>	
<p>(9) 一、卷軸不同事</p> <p>a 正本は十卷廿八品で、妙本は七卷或いは八巻、品数は同じである。添品は八卷廿七品である。</p> <p>b 今斯那日本の俗の間に流伝する「妙法華」の多くは八巻である。</p> <p>c 玄応撰「一切経音義」に「妙法華」八巻の音義と出す。</p> <p>d 「玄賛要集」にも、</p>	
<p>(6) 一、調卷不同事</p> <p>A C² 本朝に八巻とすることは、伝教大師が入唐の時、九州宇佐八幡宮において入唐の祈誓をした。大唐に於て多くの法門を御相承有りて御帰朝の時、</p> <p>B 伝教大師、泉州巻の尾に、法華経を講ぜられし時、</p>	

だ時、社内が振動し、御殿の扉が開き、親しく大菩薩が顯出し、紫御袈裟を大師に授けた。この袈裟は山門の靈宝として今に伝わる。これは法華八講の縁起である。

D 〔一義〕唐土より八卷である。

唐朝に恵命という僧がいた。深山に籠居していた。昼夜に『法華經』を誦誦した。常に一人の猿猴が来て聴聞した。その時給仕申し上げ、何をするにも懇であった。薪を拾い、菓を探して捧げた。しばらくして姿が見えない。その後天人が来て聴聞した。恵命が尋ねた。おまえはどこからきたのか。彼は答えた。私は前に經を聞いた猿である。法を聞いた功德によって忉利天に生まれた。今報恩のために聖を札す。願わくはこの經を八軸に調卷して下さい、と。この天人が恵命に告げてより、

今この称する者はこれ後秦の弘始七年に羅什の訳出した『妙法華』七卷、或いは八卷とある。

e 〔略法華經〕には一部八卷四七品六万九千三八四、とある。

f これはまさに天台御作伝教大師の将来である。天台一宗は之を以て正とするのである。

D 〔或人〕唐朝で釈惠明が經を講じ、猿猴が来て聴聞した。その後天人が来て聴聞した。天人が「願わくは七軸を八軸にして講ぜよ」と。この時から八卷とする。

B 日本にて、伝教大師が宇佐八幡宮で『法華經』を講じ、天に声があった。「法華は八年

D、

	<p>六、七巻法華七仏 薬師一休事</p>
<p>惠命という人が初めて八軸にしたのである。『法華感応伝』に見える。</p> <p>E 【一義】羅什の弟子の侃公という人が、八軸に整えたという。</p>	<p>A 【一義】そうではない。羅什が翻訳の時に七軸八軸の不同があった。</p> <p>B 七巻経の所以は、七仏薬師である。</p> <p>C 法華とは、色香美味の良薬であるので、薬師如来とするのである。人・法は異なるが実はその体は一である。</p> <p>D 脇士の薩埵は日光月光定慧の二門である。又理智の二法、</p>
	<p>×</p>
<p>である。何故八軸としないのか」と。この時已来八巻である。</p> <p>g この両説は慥かなる記に見えず、予は信じず。</p> <p>h 『略法華経』を見るに、伝教大師は八巻の経を将来すべきである</p> <p>(10) 品数事 ↓ (一五)</p> <p>(11) 文字数事 ↓ (一五)</p>	<p>×</p>
	<p>B₁</p> <p>a 蓮実坊和尚、一心三諦の良薬を以て一心の三惑を治す。</p> <p>b 【本願薬師経】には我此名号一経其耳衆病悉除身心安楽と申した</p>

<p>也。</p> <p>(9) 七仏薬師者 一仏歟十佛歟異説</p>	
<p>B 実は、一仏の上に七種の徳</p>	<p>E 十二神将是、十二時の守護である。一年十二ヶ月、日に約して三百六十日である。日月は昼夜を表し、即ち三十日である。三十日各々十二時あれば、三百六十日である。また十二神将是各々七千夜叉眷属がいる。即ち八万四千である。『法華経』の文字は六万九千字である。開結の二経を加えて八万四千字である。そこで『法華経』薬師、人法一体の義を以て七軸であるか。E また一年十二月など昼夜六時皆悉妙法常住の功德、三世不改の本有の妙行なる事を表すのである。</p> <p>F 治生産業は皆実相に相違背せずということを思ふべし。</p>
<p>A 七仏薬師とは、一仏か、十仏か異説がある。</p>	<p>C 一切衆生の身心の病を治する故に医王善逝と名づけ奉るなり。</p> <p>C 水精を以て軸と爲し、其の水精の軸の中に金を以て薬師如来をすかし奉りたまえり。其の経は山門東塔に在り。</p> <p>(8) 三仏像造三塔安置之事 a 最澄が一刀三札にして造り、三塔に安置する。</p>
<p>×</p>	<p>E 1</p>

用を顕すと理解すべきものである。

C 南閩浮提は、薬師の浄土である。だから空色は青、草木の色も青、須弥の南は瑠璃の成る所だからである。

D また、草木の二葉に生え、その上の露の置くのは、薬師の瑠璃の壺のようなもの。潤いを受け、長大な枝葉が生長する。花菓開敷るは、瑠璃の壺の薬を受け、潤いを受けて増長するためである。

E この日本は七仏薬師の浄土の習である。諸国を五畿七道に分けるのは、この心である。

F 鎌倉は、東国の城谷なので、谷を七仏に分け、東方の薬師の浄土を表す。

G 九州は日本の西であるので、鎮西と名づく。九州に分けるも阿弥陀の九品浄土を表すのである。

H 又、正月七日の七草を天に

C₁

D₁

E₁

b

山王七社の中に地主権現と申すは本師薬師如来なり。是を地主権現と号すること、此の地主にて在す故なり。

H₁

	<p>〔10〕以山王一乘 守護明神号事 七、山号、号、一乘 守護、神明、事</p>
<p>あつては七星、地にあつては七草なのである。これは即ち薬師の精霊であるので、粥に和して薬を和してこれを服すれば、除病延命の薬となるのである。</p>	<p>A 法華山王一体義なり。 B 〔山家釈〕三権諸神会して一実山王に帰せしむ。 B¹ 日本國中三千余座の冥道は皆三権の諸神なり。諸神会して山王一社に帰せしむ。開会の山王と申すなり。 C 山王七社は七仏薬師の事を顕す。法華を以て七軸と為すなり。 D 七社の上に行事早尾を加え、八葉九尊の習の時は、八軸と為し相違無きなり。 E 〔一義云〕羅什三蔵の訳より八卷なり。その証拠は天台の略法華經に帰命法華經一帙八卷四七品。隋朝より八軸分明</p>
<p>×</p>	<p>×</p>
<p>×</p>	<p>×</p>
<p>^c 八軸にすることは八正道を表す。釈云く、八邪を捨てず、八正に入る。</p>	

なり。

F【一義云】阿難結集の時、七八軸の不同有り。須梨耶蘇摩三藏梵本を以て羅什に授けて云く、句偈を取捨するな、真文を取捨するなど。再往実義の時は、釈尊法華を説く時、七八軸の不同有りと習うなり

G【玄一云】此の妙法蓮花経の本地甚深の奥蔵なり。

H【文云】是法世間相常住を示すべからず。一文一句としても本地甚深の奥蔵にあらざるということ無し。故に、七八軸共に本来常住の妙法久遠実成の説法華より此の二の調卷宛然なり。

I 其の証拠には、山王七社中の大八王子権現と申すは八人の王子、八葉蓮花に乗る。各々法華一卷を持ち、志賀唐崎の麓へ天降る。故に大八王子権現なり。

J 大八王子をば序品の日月燈

	〔11〕米字事
<p>明の八王子と一体と習う。故に靈山の妙法より已來過去久遠の昔より、八軸の経の事分明なり。</p> <p>K 八軸の表す所は一切衆生自性清淨の八分肉団八葉蓮花を表すなり。</p> <p>L 一切衆生の胸間に四方一寸の肉有り。是を方寸の肉団を名づくなり。</p> <p>M 是を二重に重ねれば八分の肉団なり。女は下に向き、男は上に仰ぐなり。</p> <p>N 今妙法蓮花經に云うは、彼の肉団は清淨八葉蓮花の開く心なり。</p>	<p>A 米と云う字は八木と云う。是は自性清淨の蓮花は即ち米穀と顕て、衆生の本命を養うなり。法華と云うも衆生の本命元神なれば、尤も八軸と為すべきなり。</p> <p>B 所詮七軸八軸は開会美義に</p>
	×
	×
<p style="text-align: center;">J₁ L₁ K₁</p> <p style="text-align: center;">(15)</p>	×

〔12〕山王七柱云
以七為數滿義也

<p>A 一は陽數、二は陰數なり。 七を以て陽滿と為すなり。</p>	<p>付て相違無きと習うなり。八軸は八教一念の開會を表すなり。 C 【山王院釈云】蓮花八葉は彼の八教を表すなり。蓮台唯一表八歸一。常一常八無前無後。 D 開會に付て、教を開き、部を開き、二不同有り。教を開く時は、円体無殊とも釈し、此妙彼妙妙義無殊とも釈す。故に但し七教を開くなり。故に七軸なり。部を開く時は尔前八教悉く所開と成る故に八教なり。 E 八教外に能開一大円教を立てざる事は融會体同不立第九の義なり。但八葉九尊の時は所開八教は八葉と為す。 F 能開法華を以て中台大日と為すなり。顯密一致の深旨なり。</p>
<p>×</p>	
<p>×</p>	
<p>×</p>	

〔13〕什翻畢結取事

<p>B 七の字は、一しと書くなり。一は陽、しは陰なり。陰陽の数総じて七と為す。故に、百千万億無量無辺の数皆七の数に極むなり。</p>	<p>C 【山家釈云】吾此山王日域の明神。陰陽不測、造化無為と釈して、山王を陰陽不測の神と申すなり。陰陽即山王理智二法境智二門なり。</p> <p>D 法華と云うは、理知一如の内証なれば七軸に調卷の事は妙法山王入法一体の義なり。</p>	<p>A 【法華伝云】什師は文殊の化形なり。昔は靈山發衆したり、今日經を訳す。筆を執る時、筆より光を放つ。光中に或時文殊の形を現す。或時は仏身を現す。四王加護し中に多門隨身す。</p> <p>B 我等衆生色心二法本來の妙法なる事は、什公所訳の妙經に極むと習う。</p>
		<p>A ↓ (8) p 【法華伝記】法師は是文殊の化形、昔は靈山の聽衆、今日經を訳し筆を取る時は、筆より光を放つ。光の中に或は文殊現す。或は仏身を現す。四王加護す。中に多門隨身す</p>
		<p>×</p>
		<p>×</p>

	<p>C 衆生の身中に八万四千の毛孔あり。一一の毛孔に八万四千の小虫あり。また、心法に約すれば八万四千の煩惱あり</p> <p>D 今妙法の知識に値い、色心の妙法の聞く時、毛孔塵勞同く妙法の光を研がれ、八万四千文字と顯るなり。</p> <p>E 法華の一印を合は、掌の印と習うなり。十指の掌を合て八軸の經に開結二經を加う義なり。</p> <p>F 両手に二十八節あり。即ち二十八品なり。之を挙げて頂戴すれば、朝暮に自妙法一部を頂戴するなり。</p> <p>G 我等が色心共に本来常住の妙法と意を得れば即身成仏掌を指すなり。</p>